慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	知の世界; その可能性と限界 : ダニエル・ ベル他
Sub Title	
Author	宮家, 準(Miyake, Hitoshi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1995
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.41 (1995.) ,p.1-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	記念講演
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000041-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

前号（第41号）の1頁目を，これに差替えて下さい。

ダニエル・ベル「社会科学—不完全なアート 日本の近代化：事例研究」

Daniel Bell "Social Science: An Imperfect Art The Modernization of Japan: A Case Study"

小林ポオル*，織田輝哉** 訳

Paul Kobayashi, Teruya Oda

ダニエル・ベル先生の記念講演への討論

富　永　健　一***

Kenichi Tominaga

知の世界；その可能性と限界
ダニエル・ベル他

慶應義塾大学大学院社会学研究科では1995年9月14日，ダニエル・ベル，ハーバード大学名誉教授の本塾名誉博士の学位授与式に際して記念講演会を行った。同教授は1919年生。シカゴ大学教授，コロンビア大学教授をへて，現在はアメリカ芸術・科学アカデミー会員である。同教授は"イデオロギーの終焉""脱工業化社会の到来""資本主義の文化的矛盾""二十世紀文化の散歩道"など多数の著書により現代社会を多角的に分析し，脱工業化社会の到来とその問題点を指摘し，多くの分野から国際的に注目されている。

ちなみに本講演会は，現代の学問研究における専門領域の細分化がもたらす弊害を超克する為に、大学院生に広い視野の中に自己の研究領域を位置づけて多角的に捉える柔軟な思考態度を身につけさせることを意図した特別招聘教授4名（ベル教授の他は高階秀爾教授，村上陽一郎教授，大貫恵美子教授）によるオムニバス講座"知の世界；その可能性と限界"の第1回講義に充当させたものである。なお，この講座は岩男寿美子社会学研究科委員（新聞研究所教授）の企画によるものである。以下，ベル教授の講演要旨，富永健一社会学研究科委員（環境情報学部教授）の討論とそれに対するベル教授の返答を掲載する。

（宮家　準****）

* 慶應義塾大学文学部助教授（人間-環境系論）
** 慶應義塾大学文学部助手（理論社会学）
*** 慶應義塾大学環境情報学部教授（社会学理論）
**** 慶應義塾大学文学部教授（宗教社会学）

社会科学——不完全なアート
日本の近代化：事例研究

ダニエル・ベル

小林ポオル，織田輝哉訳

1　1979年に慶應で開催された国際シンポジウムにおいて私が取り上げた問題は，マックス・ウエーバー（それより前にはマルクス）によって言及されたものだが，社会学理論が取り組むべき未解決の問題は，資本主義がなぜ西欧で発展して東洋では発展しなかったのか，ということであった。ここでマックス・ウエーバーが東洋ということばで示したのはまず第一に中国であって，日本ではなかった。彼が指摘しているとおり，中国は巨大な版図を持ち，広範な商人層が既に形成されており，また，少なくともエリート階層については読み書きと勉学の必要性が重視されていたが，それでもなお資本主義は発展しなかった。その理由について彼は著書「中国の宗教」のなかで，儒教の倫理が階級秩序を重視し，経済活動を蔑視したからであると書いている。

資本主義（この概念は，多くの社会にふつうに見られる利益追求や富の獲得以上のことを意味するが）は，以下の2つの理由により西欧社会で発展した。

1　西欧において，ギリシャ哲学・科学に起源を持つある特殊なタイプの「合理性」——効用理論の基礎となった手段—目的の関連づけおよび計算法——が発達していたこと

2　宗教が経済活動に徴用されたこと：プロテスタンティズムの倫理は労働をすべての人にとっての召命，修養として重視したこと

しかし，1970年代以降に生起した問題は，なぜ日本で——そして現在では東アジアのかなりの部分で——資本主義がこんなにもうまく発展したか，ということである。私が述べてきたことは，もし社会学理論に手がかりを求めるならば，それはウエーバーよりむしろデュルケームの社会的連帯に関する考察に求めるべきだ，ということであった。私はここで再びこの疑問点に立ち戻った上で，社会学理論の方法論的検証を行いたいと思う。社会学理論は，普遍的なテーマでなく過去の具体的事象を扱う歴史学以上のものでなければならない。社会学理論は，「包括的な法則」ではないにせよ，われわれが社会現象の説明を引き出すことが出来るような一般化された体系を持つもの，または，持つべきものである。

ここで，私の意見を図式的にまとめておきたいと思う。

2　近代社会理論はコントの進歩的発展段階の理論とともに始まった。これは，神学的，形而上学的，実証的（科学的）発展段階である。コントはこれを，サン＝シモンの軍事社会から産業社会への変動の素描から導いた。この枠組みは，後にハーバート・スペンサーやレイモン・アロンによっても用いられた。

3　より大きな哲学的枠組みは，ヘーゲルによって与えられた。彼は，歴史発展の原動力として絶対精神の自己展開を用いた。彼はそれを最終的には必然性の拘束を終わらせ，すべての二項対立（例えば精神と物質，自然と歴史，主体と客体）を克服し，「歴史の終焉」となる普遍主義として規定した。理性の発展の図式から見ると，インドをはじめアジア各国は「凍りついた」社会であって，専制政治の下で合理性を発展させることができなかったのである。

4　マルクスはヘーゲルの抽象的範疇を「現実化」し，社会的位置づけを与えた：二項対立は，持つ者と持たざる者，精神的労働と肉体的労働の分業，都市と農村の分裂等々に，翻案された。歴史を進める原動力は理性ではなくその実体的概念である技術（Techne）になり，必然性は克服され豊かな「自由の王国」としての共産主義社会が歴史の終着点になる。

マルクスのこのまばゆいばかりの図式は，ユートピア的未来像を描くためだけでなく，社会学的方法論のためにも構築されているのである。マルクスは，社会の共時的見方（構造）と継時的見方（社会変動）とを結合させた，下部構造たる経済様式に基づく単一図式を提出したのだ。このマルクスのもの以外に，このよ

うな単一の結合を与える理論は他にはない。

その方法論的困難：マルクスの図式に現れる諸概念は，社会の構成要素ではないということ，つまり，記述している当の現象のなかに本質的に存在するものではない，ということである。この図式は社会に当ててそれを分類するための，いくつかのカテゴリからなる概念的プリズムであって，例えば，社会の支配様式の変遷を記述するための，家父長的・家産的・合理合法的権力というウェーバーの権力の概念図式とも同様の機能を有するものである。

理論というものは，真であるか偽であるかのどちらかである。概念図式は有用か役立たずかのどちらかである。あえて言えば，マルクスの図式は1750年から1950年までの西欧社会を理解するための最良の図式であろう。しかしそれは，社会の一般理論でも，歴史の一般理論でもないのである。

マルクスに追随して，社会学的理論も「概念図式」へと向かった。産業化という歴史的事実に依拠しているが，めざすところは無歴史的あるいは「一般的」概念図式である。すなわち，テンニースのゲマインシャフトとゲゼルシャフト，デュルケームの機械的連帯と有機的連帯，ウェーバーの伝統社会と合理社会などはこの例である。しかし問題は，このような図式がはたして社会連関のすべてを網羅する包括的なものなのか，どれくらい有用なのか，ということである。

5　社会科学のモデルとしての新古典派経済学。ガリレオに始まる古典力学の派生物としての経済理論。現実の事物から，閉じた領域内での対象の「属性」へのシフト。微積分可能にするために内実（資本と労働）を均質化して用い，一定の生産関数の下で相対的コストと効率的利用の推定を可能にする第三次言語としての経済学。基盤は，すべての市場を統合する一般均衡である。経済理論の弱点は，それ自体が現実の制度から逸脱してしまうことである。「経済」と「経済学」の区別。経済人の行動は安定しており，選択は常に合理的になされるという仮説（計量経済モデルとラグ変数の問題；現在の事態に対する「政治的割引率」と「経済的割引率」。「信頼」の果たしている役割）。

6　社会学的な「閉システムモデル」。パレートとパーソンズ。パーソンズは社会関係と社会システムに関する普遍的な分類体系を樹立したが，その高度に抽象化された中心概念を，現実社会に適用してしまうことの問題。古典力学や経済学とは異なり，社会学には計量的概念が欠如している。例えば，富，権力，社会的地位の間で，それぞれの尺度値を他の尺度に変換するのに，どのように転換率を設定すれば扱えるのか。

7　多くの社会学の図式が，社会が全体的に統合されていることと，その統一を保った様式ないし時代が全体として変遷する，という社会変動の理論を当然のものとしている。つまり社会変動は，明確に区分され，その中では有機的統合を保つ時代やタイプに区切られている。

機能主義的な見地からすれば，社会の統合は，規範を整備し，それ以外は規制することで「適法な」行動体系を形成する価値システムを通じて維持されていることになるし，また，マルクスは支配的な生産システムによってひとつの時代区分が維持されると考える。社会文化的な違いが根拠となって時代区分が成立するとするソローキンの場合も，感覚的ないし観念的な原理が社会を統合する。

8　日本のケーススタディ：閉じられていて比較的統合された社会から，ダイナミックで「近代化された」社会への変化をどのように説明したらよいのか。

1　特殊な役割を担った軍事—政治的エリート（西欧知識をいち早く吸収した層）による上からの社会改革

2　社会改革の正当性を保証し，神話的過去との連続性の保持および変動を是認するものとしての天皇制

3　教育勅語に象徴される，宗教と文化の，経済システムへの徴用

9　西欧的近代化：普遍的な価値観と使命。社会分化のプロセス。これに対し，対照的な日本の特殊で持続的な社会統合（村上泰亮の「イエ」テーゼ）。

10　交換の３つのタイプ

1　経済的交換：契約により媒介される

2　社会的交換：贈与と互酬性により媒介される

3　政治的交換：代表権の委託と請願，投票の役割

経済的交換は，ずっと西欧資本主義の際だった特徴であった。日本は社会的交換を制度化したという点でユニークである。

11　日本は西欧から技術と大衆文化を導入した（ただし，岩男教授によれば，ドラマ「ダラス」は日本では人気がなかった。日本の例外主義のユニークな例）。それでは，日本は西欧の近代化の道筋をそのまま踏襲するのだろうか。

12　領域間の断絶：社会は，「一群の変数の変化が他のすべてに，ある決まったやり方で影響を与えるような全体的・有機的システム」ではない。社会は３つの異

表 1:　現代社会の領域の断絶

領　域	中軸原理	中軸構造	中心的価値志向	個人の社会との関係	基本プロセス	構造的課題
技術-経済	機能合理性	官僚制	物質的成長	役割に分化する	専門化と代替	制度と個人の具体化
政　治	平　等	代議制	統治される側の合意による支配	決定への参加 個々人の富と幸福の追求の尊重	交渉と衝突 協　調	権利賦与 メリトクラシー 権力集中
文　化	自己実現	意味と人工物の創出	「新しさ」「独創性」の価値の重視	全人性の強調	ジャンルと差異の解体	天才の民主化 価値基準の危機

なった，しばしば自律的な領域から構成されている（しかし，強い宗教的影響の下などでは——初期の西欧カソリック文化，神政一致のイスラム社会またソヴィエトに代表される全体主義国家などでは——社会の各領域を一貫させようとする努力がなされている)。3つの領域とは，経済，政治そして文化である。

1　経済は，多かれ少なかれ，ひとつのシステムをなしている。これは，交換を通じての諸変数の相互依存性が強いためである。変化は交換に対して線型的であり，生産またはプロセスがより効率的であれば，あとはコストの問題であり，それに応じて使用される。

2　政治は権力や特権を求める争いを制御し，法を執行する「秩序」(強制によるものであれ，合意によるものであれ）である。

3　文化はその表出次元において一連のスタイル（古典・バロックなどの）であり，宗教的次元では一連の異なる世界観である。

過去の幾多の政治システムは崩壊してしまったし，経済システムも消滅した。しかし，仏教・神道・ヒンドゥー教・ユダヤ教・キリスト教・イスラム教など偉大な歴史的宗教は，その中核部分が認識できる程度には，生き残っている。そして，ギリシア演劇・ダンテの詩曲・源氏物語に代表される平安期の繊細さ・世阿弥の能等はみな，時を超えてその審美的・倫理的影響力を保持している。

しからば，時代はいかなる意味で明確に区切られて成立するのであろうか。さらに両倒なことに，各領域において軸となる原理はしばしば相互に矛盾する（表1参照)。例えば，経済システムにおける役割分業と機能合理性，文化領域での自己実現の志向，政治領域での平等主義が，現代社会において同時に推進されている。

13　西欧の社会理論は，歴史の終着点と普遍国家の発展を仮定している。これらの主要な特徴は，以下の3つである。

1　市場経済

2　政治的平等と民主的形式

3　個人主義と近代精神：伝統的価値観の拒否，性行動をはじめとする行動規範の自由な選択

14　しかし，これらが該当するのは欧米社会にとどまる。われわれは未だ「歴史の終焉」には立会っていないし，むしろ「歴史の復権」が目立つ。それは西欧の精神的危機を背景とした宗教の復古主義，民族的・原始的アイデンティティにみられる。また，シンガポール・インドネシア・マレーシアなどアジア諸国の，西欧流民主主義ではない，上からコントロールされた社会での経済発展も見られる。

15　もし21世紀が太平洋の世紀になるなら，中国の発展が重要な鍵になる。10億を超す人間が，共通のアイデンティティのもとに社会を構成することは，いかにして可能であろうか。マルクス主義は既に失敗した。まとめるに十分な力を持つ宗教は，存在しないように見える。社会をまとめあげるものとしては，明治期の日本に見られたと同様，ナショナリズムしか残されていないのだろうか。しかしナショナリズムは，民衆を動員するための「敵」を必要とする。誰に対して中国は立ち向かうのだろうか。

16　社会科学は，未来を予測するための「アルゴリズム」を持たない。一般社会学理論は，高度に抽象的すぎる。われわれにできることは，案内図としての歴史に立ち返り，その中で社会の特徴を把握することでしかない。

17　日本はいま変換期にある：金融システム・経済システムは問題を抱えている。政治秩序にも方向性が見えない。文化はさまざまなスタイルの混乱に向かってい

る。自国の国民や文化にプライドを持つためには，その実体的な裏付けと，それを伝統として保持する努力が必要である。しかし，近代化のプロセスは，ともすると伝統文化を浸食してしまう。日本はどのようにしてこれを解決するのか。

18　西欧社会理論の主軸は，社会が普遍性を志向して進化していくとの考え方である。たとえそれが達成し得ぬ幻想であっても，いくつかの利点は残る。普遍的価値観と人権の理想である。では人権とは何か。

人間はその尊厳を侵害されないという考え（拷問・レイプの撤廃）

社会における法の支配と市民権の観念

人間の尊厳と，見苦しくなく最低限以上のレベルの生活を維持できる手段が確保されること

他者の権利を尊重する感覚

生活に適合した環境（大気・水・空間）の創出

19　以上述べてきたことが示すことは，社会理論というものが，人間本性の探求や社会の研究から導かれる規範的・道徳的関心から独立ではない，ということだ。これは社会科学が未完のアートだとしても，そうあるべきものなのである。

ダニエル・ベル先生の記念講演への討論

富　永　健　一

私がベル先生に最初にお会いしたのは，私がハーバード大学にベル先生をお訪ねした1967年のことでした。その当時，先生はすでに“イデオロギーの終焉”の著者として，世界的に著名でした。私が先生をお訪ねした目的は，『読売新聞』から派遣されて，ベトナム戦争下におけるアメリカの“turmoil”すなわち人種暴動や“young radicals”などの動向，またベトナム戦争に対するアメリカの労働組合の態度や市民の反応などについて，新聞に記事を書くために，ベル先生のご意見をうかがうことでした。

このときはまだ『資本主義の文化的矛盾』は出版されていませんでしたが，ベル先生はのちに同書で展開された経済―政治―文化という3分法 (trichotomy) 図式を用いて，私の問いに答えられました。ベル先生の理論は，パーソンズの理論のように抽象の水準の高い一般理論ではなく，経済と政治と文化の具体的な動向を念頭において，それらを説明するための概念図式でしたから，そのときの私の目的にとってたいへん役に立ちました。

ベル先生にお会いした第二の機会は，1970年にスイスのチューリヒで先生がオーガナイズされた「ポスト工業化社会」会議においてでした。私がこの会議にただ一人の日本人として招聘されたのは，ベル先生が3年前のことを覚えていてくださったためであると思います。この会議は，先生の『ポスト工業化社会の到来』という本が出される3年前のことで，出版前にいろいろの人の反応を聞いておこうという意図に発するものであったと思います。私はこの会議で，先生の「ポスト工業化社会」の概念に異論を唱えたのですが，先生は私の意見をも同書のなかで公正に記録されました。

*

さて今日の私の役割は，ベル先生の講演にコメントをすることです。ベル先生はわれわれに，ヴェーバーによって提起された問題「なぜ資本主義は東洋で発展し得なかったか」に対して，20世紀の最後の1/3における問題は「資本主義はなぜ日本においてこのように成功的に発展し得たか」ということであるといわれました。ベル先生のこれに対する答えは，ヴェーバーよりもデュルケーム，すなわち日本人の「連帯主義」と「グループイズム」にあるということのようです。先生は西洋の普遍主義と日本のパティキュラリズムとを対置され，村上泰亮さんらの「イエ社会」テーゼに言及されました。つまり日本の近代化は日本の伝統主義によって可能であったというのが，ベル先生のテーゼです。

しかし他方，ベル先生は「資本主義の文化的矛盾」テーゼを日本にも適用されました。すなわち，日本の近代化は日本の伝統主義を掘崩すというのです。すなわち，ベル・テーゼはつぎのような二重構造になっているのです。「日本は伝統主義的なパティキュラリズムの精神によって，西洋とは異なるユニークな資本主義をつくりあげたけれども，日本の資本主義の成功と近代化は日本のこの伝統主義的なパティキュラリズムの精神を掘崩す。ちょうど西洋において資本主義の発展がプロテスタンティズムの禁欲倫理を掘崩したように」というのです。しかしそれなら，日本はその結果どこに行くのでしょうか。ベル先生はこの問いに答えていません。

私の近代化理論における考え方は，ベル先生とは異なっています。大分前にマリオン・リーヴィが，近代化を「普遍的社会的溶剤」(universal social solvent) というメタファーによって表現しました。その意味は――私の解釈が間違っていないとすれば――，近代産業文明は西洋人によって創始されたけれども，非西洋世界に伝播されるのにともなって，それが接触した多くの異質な他文明をその中に溶かし込んで，普遍文明になったということです。私もこの考え方に賛成です。たとえば近代の科学技術，資本主義，社会主義，株式会社，核家族，新聞・テレビ，ヨーロッパの音楽や絵画，スポーツなどは，どれもヴェーバーがいったように西洋人によって創始されたものですが，今日では世界中で多くの非西洋人によって担われています。

しかし他方では，近代医学の中に漢方薬を導入したり，株式会社の中に「日本的経営」を導入したり，ヨーロッパの音楽に東洋のメロディーを導入したり，オリンピックの種目の中に柔道を導入したりすることは可能であるばかりでなく，現に行なわれています。同時に，忘れてならないことは，それらの普遍的社会的溶剤によっ

て，非西洋社会の伝統文明もまた変質していくということです。

たとえば，ベル先生が言及された村上さんらの「イエ・テーゼ」は，有賀喜左右衛門の「イエと同族」テーゼのヴァリエーションですが，有賀と村上の決定的な弱点は，イエと同族がまさに消滅しようとしていた時点で，それが不変のものであるような主張を立てたことです。有賀が死んで10年もたたないうちに，フェミニズム運動は家父長制家族を葬っただけでなく，核家族までを壊しつつあります。農村では3世代家族がまだ残っているとはいえ，家長が権力をもっていたら息子に嫁が来てくれませんから，家父長制家族は消滅せざるを得ません。イエも同族ももうとっくに過去のものになり，「日本的経営」さえしだいに解体しつつあります。

*

ベル先生によって本日提出されたテーゼの中で，私にとってとりわけ受け入れがたいのは，「社会は，その中の1つの要素が変化したときに，すべての他の要素がそれによって影響を受けるという意味でのシステムではない」という個所です。ベル先生は，この仮定の下に，広義の社会の領域を「経済」「政治」「文化」の3つに分け，それらは相互に独立であるとされます。ベル先生が『資本主義の文化的矛盾』において，この図式を用いて強調されていることは，文化が経済や政治から独立であるということです。そこでベル先生は，源氏物語や世阿弥の能の例をあげられて，それらが現代でもなお美的・道徳的な影響力を行使しているといわれます。しかし源氏や能は，今日少数の専門家によって研究されているだけで，ロック音楽を鳴らしている現代の若者たちにそれらが美的・道徳的な影響力を行使しているとは，私は思いません。

私の近代化理論では，ベル先生の3分法とはちがって，「経済の近代化」「政治の近代化」「狭義の社会の近代化」「文化の近代化」の4領域を設定し，それらのあいだの相互依存を仮定しています。ベル先生の3分法では，私のいう「狭義の社会」が経済と一緒になってしまっているようですが，私の図式では，家族や村落共同体や企業組織や社会階層や国家と国民社会は，狭義の社会を構成します。近代化と産業化によって，「家と同族」や「ムラ社会」や「日本的経営」が解体していくのは，これらのサブシステムが相互に独立でないからです。もちろん，それらの相互依存にはタイムラグがありますから，戦前の日本においてイエが解体しなかったり，高度経済成長の過程で「日本的経営」が持続したりすることには，すこしも不思議はありません。イエや日本的経営が永続的なものであるかのように錯覚するのは，ものごとを性急に短絡的に判断するからです。もうすこし長期的な視野をとれば，それらがやがて解体していくものであることに気付くはずです。村上氏らのイエ社会論が一時人気を博したのは，短絡的にものごとを判断する人が多いことを示しています。しかしそのような短絡的な判断は，衣服のデザインのファッションと同じように，短い寿命しかもち得ないでしょう。

*

社会科学は「科学」ではあり得ず，「不完全なアート」(imperfect art) にすぎないというベル先生のテーゼには，私もある程度まで賛成です。私自身の用語——それはパーソンズから来ているのですが——でいえば，実証主義と理念主義のどこか中間にあって，たえず両者のあいだを揺れ動いてきました。村上泰亮さんは元来は新古典派の経済学者で，「科学派」だったのですが，『文明としてのイエ社会』によって「アート」派に転向されました。私自身は社会学を「科学」にしたいという夢を若いときにはもっていましたが，それは挫折しました。ベル先生はパレートとパーソンズを一緒にして「科学」派と見なしておられるようですが，パーソンズが主張した「主意主義的行為の理論」は，イギリス功利主義とドイツの歴史主義との収斂をめざしたものですから，パーソンズはパレートほど科学派ではありません。しかしそのパレートも，新古典派の経済学者としては科学派でしたが，“Mind and Society” のパレートはアート派にかなり転向しています。

ベル先生は『資本主義の文化的矛盾』において，ランボオから現代のポップ・アートまでの文化を論じておられ，これはベル先生の独壇場ですから，私はこれらについて先生と争うつもりはありません。社会科学者が自分の学問を科学とアートの両極のあいだのどこに位置づけるかは，その人の個性によることです。しかし，社会科学の命題が正しいかどうかは，実証的ルールの上できめられねばなりません。私はベル先生の「経済と社会と文化は相互独立であってシステムを構成しない」というテーゼは，実証科学のルールによって反証 (falsify) することができる——ただしおそらくは間接的に——のではないかと思っています。社会科学はその程度にまでは「科学」であり得るのではないでしょうか。

ダニエル・ベル教授の返答

まず最初に一言申しあげたいのですけれども，ものを書く者としては真剣にとらえてくださること以上にうれしいものはありません。富永先生には，私の理論をきちんと読んでいただいて，それに対してコメントをしていただいたことに対し，お礼を申しあげたいと思います。私は長年にわたり富永先生に敬意を表してきましたけれども，それを実証するものです。

先ほどおっしゃっていたチューリッヒにご招待したというのは，おっしゃったように先生と面識があったからではなく，ずっと作品を読ませていただいて尊敬していたからであります。

次の点に関して先生がおっしゃったことは正しいと思います。日本において社会学理論には2つの考え方がある。1つは西欧化と言っていいのでしょうか。それは富永先生がおっしゃったような科学的な見方すなわち，普遍的見方，そして今一つは公文俊平先生，村上泰亮先生，佐藤武三郎先生が提唱された「イエ」の考え方です。日本の特殊性を私が重視したということは，ある程度までは「イエ」の理論に基づいているかもしれません。しかしながら完全に同じであるとは言えません。公文，村上，佐藤先生の統合理論，そして富永先生の実証理論と私の理論はちょっと違います。それは脱マルクス主義と言ってもいいと思いますが。マルクス主義，そしてウェーバーの理論の最もよいところを社会学のなかに取り入れたものです。

簡単に申しあげたいのですが，「イエ」の理論は，ライシャワーやロバート・ベラーなどの学者をたいへん引きつけたものがあるのですけれども，非常に重要な点で失敗しているところがあります。それは政治，権力を含んでいないことです。私は，家の理論によって日本のファシズム，軍国主義を説明することはできませんでした。また日本の対外政策を説明することもできませんでした。1890年から1940年にかけて，日本は4回も戦争を行っているのです。それは韓国，中国，ロシア，米国に対してです。

このように，家の理論に見られる内部を統合するという考え方は強みはあるんですけれども，日本の対外の政治を説明できないという点では，不十分な理論です。これが私の「イエ」理論に対して感じることです。

村上先生は日本のファシズムについて書いていらっしゃいますけれども，そちらのほうが魅力があると思います。

もう一点，富永先生のご質問に関してですが，私は経済，政治，文化の領域が現実においてまったく完全に独立していると考えているわけではありません。これらは社会の側面を描写しているわけではありません。分析をするツールです。概念的図式なのです。それによって歴史的な状況の矛盾や断絶を見ることができるのです。この3つが完全に独立しているものであると考えていません。自立していることはあります。これは独立とは違います。つまりリードすることができるか否かです。

時代によっては，これらの3つの要素のどれかが出てきています。たとえばヨーロッパのカトリックでは，文化が支配していましたし，日本の明治時代においては政治が支配していました。これは西洋の方法によって日本の近代化を指導しようとしていたわけです。

そして現在の日本においては経済が支配しています。私の図式は描写する為のものではなく，さまざまな断絶，矛盾を分析するツールであるのです。

私の発表の最後のほうで，申しあげようとしたのは，政治，経済の間の緊張，そして文化と原理主義的宗教の間の緊張という現代の傾向を見せようとしたわけです。これらの変動要因を分けて，より分析的なかたちで見たいと思ったのです。

最後に，あまり詳しく申しあげる時間はありませんけれども，近代化の問題について申しあげたいと思います。昨日，サントリー財団のワークショップでペーパーを発表しました。そちらでは近代化について3つのワークグループがありました。

近代化というのは制度に与えられるものです。社会のある要素をほかの方向にもたらそうとするものです。しかし近代化と近代性とは違います。近代性は精神を表すもので，さかのぼるものです。近代性の起源は，ギリシャ思想，ローマ思想，そしてルネッサンス時代などにさかのぼることができます。

近代性とは都市性です。都市化，ヒューマニズム，許容性，新たな考え方を取り入れるということ，そして探究的であることをさしています。しかし近代性は近代化と独立していることがあります。日本の歴史を見ますと，近代化が明治時代とそれ以降に起きています。しかしながら近代性というものは起きていません。

日本の1920年代，30年代を見ますと，政治的な抑圧

がありました。過激派や，共産主義の人たちが自白を強要されました。軍事，技術，経済構造においては近代化は起きましたけれども，政治の面では近代化は起きていませんし，近代性は起きていません。私は政治，経済，文化の間のこのような断絶を見ようとしたわけです。

もちろん富永先生がおっしゃった理論には敬意を表します。私もそういうものを使わせていただくことはあります。しかし最終的にはこのような断絶を見るほうが，よりよい考え方ではないかと思います。個人的な意見ではありますけれども。